

楡
周平

Gulliver Panic
by Syuhei Nire

ガ
リ
バ
ー
グ
！

平周 楡
ガリバー・
Gulliver Panic
by Syuhei Nire
パニック

楡 周平 (にれ・しゅうへい)

1957年生まれ。米国企業在職中の1996年に出版した初の小説『Cの福音』が、いきなりベストセラーとなる。1997年春には『クーデター』、1997年11月、『猛禽の宴』を上梓、ベストセラー作家としての地歩をさらに固める。スケールの大きい国際謀略小説の書き手として注目を集めている。

N. D. C. 913 314 p 20cm

ガリバー・パニツク

定価はカバーに表示してあります。

第一刷発行 一九九八年七月二一日

著者 楡 周平
にれしゅうへい

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社 講談社



〒112-8001 東京都文京区音羽二―一二―二一

出版部 〇三―五三九五―三五〇五

電話 販売部 〇三―五三九五―三六二二

製作部 〇三―五三九五―三六一五

印刷所 株式会社精興社

製本所 島田製本株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸局文芸図書第二出版部宛にお願いたします。本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き禁じられています。

© SYUHEI NIRE

1998 Printed in Japan ISBN 4-06-209145-3 (文2)

ガ
リ
バ
ー
・
パ
ニ
ツ
ク

装丁
多田和博
装画
西口司郎

夕暮れと日没の狭間はざまがはつきりとしなない一日の終わりだった。

空一面にはりついた雲は時間の経過とともに低くなり、海と空との境界線をますます曖昧あいまいなものにしていく。淀んだ空気をゆっくりと攪拌かくはんするかのようになり、生暖かい風が吹き抜けるたびに、そこに含まれる湿り気の微妙な変化にともなうて大気の質量がわずかに変化していくのが分かった。遠く稲妻の閃光せんこうが時おり煌々と、厚く垂れこめた雲の上を雷鳴が駆けていく。

玄界灘げんかいなだに面した海岸、コンクリートの護岸で補強された一画では、大規模な建築工事が行なわれていた。ほぼ完成に近づきつつあるその建物は、ふたつのユニットに大きく分かれていた。コンクリートの巨大な箱といった観の三階建ての建物、隣接した変電施設には高圧電流が走る鉄塔から直接電線が引きこまれている。そこから伸びるいくつかの線は、併設されている二階建ての建物に繋がっている。

工事内容を示す金属でできた掲示板には、『養殖魚増産施設工事』と白の地に黒いエナメルで鮮やかに書かれている。

建設期間中、建物を覆っていた足場はすでに取り払われてはいたが、敷地は工事車両の轍や作業員たちの足跡が残り、建築資材の切れ端や梱包材が散乱する現場の様子から、まだこの施設は完工間際で稼働していないようだ。

一人の男が現われ、二階建ての建物の基礎部分に視線を凝らしながらゆっくりと歩き始めた。黄色いヘルメットに黄土色の作業服、そして地下足袋を履いている。作業服の胸には金茶の糸で『熊田工務店』の縫い取りがしてある。うつむき加減になって歩くたびに、男の首に巻かれたピンクのタオルがそのリズムに合わせてゆっくりと揺れた。何か不具合な部分でも探しているのだろう、男は手にした金属の棒で建物の基礎部分と地面の間を掘り返しては何事かを確認している。

その何箇所目かに来た時、隣接する変電施設に設置された変圧器の群れが一斉に音をたて震えだした。雷が近づくと電柱の上に設置された変圧器が唸りをあげることがあるのだが、それにしては音が大きすぎる。

——はて、設備の試験でも始まったのかな。

土を掘り返す男の手が止まった。作業事務所のホワイト・ボードに書きこまれた作業スケジュールを思いだした。記憶はさだかではなかったが、そんな予定もあったような気がする。

しかし、そんなことは男にとってどうでもいいことだった。不具合な箇所を探しだし、施工への引き渡しをつつがなく終わらせる。建物がどういう目的で建設され、何に使われようが作業員である男の仕事にさほどの違いがあるわけではなかった。

男の興味はすでに工事の不具合箇所の発見に移りつつあった。

変圧器の唸りはさらに高く、周囲の空気を震動させる。高圧線が引きこまれた変電施設の中には、十個ほどの変圧器が設置されていたが、めいめいが奏でる違う波長が、徐々に合い始めたのである。波長はみつつからふたつ、そしてひとつとある周期に向けて共鳴しつつあった。絶え間なく鼓膜を刺激する音の強弱が、めりはりを持つ。それをはつきりと感じた時、男は自分の目に映る周囲の光景が、音の周期に合わせるように歪み始めていることに気がついた。

——何だ……これはいったい……。

異常に気がついた瞬間。自分の頭の真上からカラカラという乾いた音がしたかと思うと、男は自分の体が眩^{まばゆ}いばかりの光に包まれるのを感じた。虹色の光、いやそれは限りなく透明に近い白い光だった。痛み、快感、あるいは浮揚感のようでもあり、自分の体が地に沈んでいくような不快な感覚であつたのかもしれない。正と負の相矛盾する不思議な感覚に包まれながら、男の意識は急速に失われていった。そして完全に光の中に吸いこまれていく瞬間、男は変電設備と建物が同じように光に包まれているのを見た。

男は知らなかったが、この瞬間、落雷と試験的に流された高電流、そのふたつがあいまって、局地的に強烈な磁場が発生した。変電施設の中に置かれた変圧器の微妙な配置、そして共鳴。それぞれが奏でる波長がすべて一致し、頂点に達したとき、一点に天からの膨大なエネルギーが降り注いだ。磁場は拡散され、無数の波動となって時限空間を切り裂き、そしてそこに大きな穴が開いた。

——いったい自分はどうなるのだろう……。

凄まじいばかりのエネルギーに包まれるのを感じながら、薄れゆく意識の中で男がはつきりと

認識した最後の感情だった。

2

夜明けがいつにも増して静かに感じられたのは、昨日の昼から夜半まで吹き荒れた風が凄まじいものだったからに違いなかった。

安定した大気は生温く、雨水を含んだ地面から早くも蒸発しはじめた水分は深い霧となつて、淀んだヴェールの中に周囲のすべてを埋没させていた。長い九十九里の海岸線に沿つて生える松の防風林も霧の中に没し、シルエツトでさえ存在を確認することはできない。聞こえるのは断続的に一定のリズムで海岸に押し寄せる波の音。ただそれだけだった。

防風林を隔てた内陸側は水田が広がっており、間にまっすぐ海岸に向かつて延びる農道がある。雑草におおわれていない二本の轍の上をわずかばかりの漁具と弁当の入った籠を持ち、海岸に向かつて歩いていく二人の男の姿。それがヴェールに覆われた世界の中で動きのあるものすべてだった。

日焼けした顔には深く刻まれた皺が浮かび、短く刈りこまれた堅い頭髮には白いものが混じる七十歳にはなろうという老人と、髪をいま風に茶色に染めてはいるが、頭にタオルの鉢巻をしたところがいかにも漁師といったまだ二十歳ぐらいの若い男の二人だった。

二人が身にまとった胸まであるゴム長が、歩を進めるたびに妙に妙な鈍い音をたてた。

「急げよ隆志。二日も網を揚げてねえんだからな。魚がいつぱい入つても、駄目になつてんのが多いにちげえねえ。選別の時間を考えたら、急がねえと今日の競りに間に合わねえ」

先頭を行く老人が、歩を進めると、

「わかつてるって、じいちゃん。それにしても夕べの嵐、凄かったな」

口の端にくわえた煙草をふかしながら、若い男が答えた。

「俺も海に出て、ずいぶんになるけど、まあ、あんな嵐は初めてだ」

「天気予報じゃ台風って言ってたけど……」

重量のある漁具を、持ち直した孫に向かって、

「なにいつてる。あんな台風があつてたまつか」

視界のきかない前方に目を凝らしながら、低い声で言った。

六月に台風が日本本土を直撃するのは稀まれにあることだが、老いた漁師が言うのも道理、昨夜の嵐は、台風という言葉をもつて表現するにはあまりにも奇妙な現象だった。

普通台風は遙か南の洋上で発生した熱帯低気圧が成長し、渦を巻きながらしかるべき形をなし、発達しながら北上を始めるものだが、昨夜のそれは九十九里沖で突如発生したかと思うや、極めて短時間のうちに関東地方を直撃したのだ。中心気圧八百五十ヘクトパスカル、暴風雨圏半径三百キロという異常な規模の台風は、折から本州上空に停滞していた梅雨前線を刺激し、瞬間最大風速六十メートル、半日の雨量千五百ミリという、気象観測史上類を見ない暴風雨とともに、大きな被害を関東地方にもたらしたのだ。そしてさらにもうひとつ、出現があまりに唐突であつたならその消滅もまた突然だった。あれほど大きな台風が関東地方を横断したかと思うと、奇妙なことにあつという間に消滅したのだ。

ある者はそれを天に吸い上げられたようにと表現し、ある者は地に吸い込まれたようにと表現したが、ともかく姿を消してしまったのだ。

異なる時限空間同士が繋がった時に起きた激しいエネルギーの放出。それが昨夜の嵐の正体だったのだが、この世界の人間にことの真相が分かるはずもない。とにかく人類が初めて直面した、空前絶後の奇妙な現象であったことだけはまちがいないかった。

——人家にあれだけの被害がでているんだ。網もまず無事であるわけがねえ……。

海岸に向かう老いた漁師の足は自然と早まった。

濃い霧は、まるで体にまとわりつくように濃密だったが、それでもしばらく行くと道の上に大量の松葉や折れた枝が散乱していることから、自分たちが防風林の中に入ったことが分かった。徐々に明るさが増す光が、濃密な霧の中にたたずむ亡霊のように周囲に立ち並ぶ松の木々をぼんやりと浮かびあがらせた。

松林の先にはコンクリートの防波堤があり、海岸の砂浜の上には数隻すうせきの小舟があった。二人はその中の最も古い小舟に取りつくと、無言のままそれを海に向けて押し出す作業を始めた。かたわらに積み重ねてあったコロを手にし、海岸の波打ち際まで順に並べる。その作業がすむと、小舟こふねが艀ともの方から満身の力を込めて押し出した。

老人の弛ゆるんだ皮膚の下に、鍛えられた筋肉がその存在をまだ誇示するかのよう膨らみ、一方の孫の方はいえ、張りつめた皮膚が弾力のある筋肉によって張り裂けんばかりに伸び切った。

微細な砂、そして船底とコロが擦こすれる鈍い音がし、小舟はゆつくりと、しかし確実に海に向かって滑り始めた。

押し寄せる波が舳先へさきを洗い始める。まず最初に老人が、そして波を数度乗り切ったあたりで、若い男が小舟に乗りこんだ。艀ほんろうに立った若い男は、波に翻弄はんろうされる不安定な小舟の上に中

腰で立つと、すかさず櫓^こを手にし、腰のあたりでリズムを取りながら沖に向けて小舟を漕^こぎだした。

絶え間なく響く潮騒の音に、櫓を漕ぐたびに上がる虫が鳴くような細かい音色がアクセントを刻む。大きく上下動を繰り返していた舳先のリズムが、すぐにゆったりとしたうねりにとつて代わった。

濃密な霧を切り裂くように小舟が進み始めたところで、舳先に坐っていた老人は、胸まで覆われたゴム長の内側から煙草を取りだし、一本を口にくわえ、火をつけた。

両手で覆われた中がライター^{ライター}の火でポウーと赤くなったその時、東の空が明るくなり、顔を出した太陽の日差しが濃密な霧に反射し、濃い赤からオレンジへ、そして金色、白へと見事なグラデーション^{グラデーション}を織りなした。

その刹那^{せつな}、まるで日差しが大気をゆつくりとかき乱すかのように風が起きた。濃密な霧が、その大気の流れに乗ってうつ血^{うつけつ}していた血液がじわりと流れだすかのように動きだした。

「隆志。そろそろ船外機、回せや」

老人はわずかにうしろを振り向き、霧に覆われた先を見た。

「はいよ」

若い男は返事をする、櫓を引きあげ、小舟の艀^{かぶた}に固定してあった船外機のスクリューを海中に沈めにかかった。気配を背で感じながら、ふたたび煙草をひと息吸ったところで、奇妙な静寂が続いているのを老人は感じた。

艀で作業を続けていた孫の手が突如止まったのだ。

「おい、隆志。船外機」

そう言いながら振り向いた老人の目に、無言のまますべての動きを止めた孫の姿が飛びこんできた。

「どうした、隆志」

老人の怪訝な声に、

「なんだ、あれ」

若い男の低い声が返ってくる。

「なにが？」

見れば孫の視線は陸の一点に向けられている。

穏やかだが断続的に吹き続ける風の流れとともに霧が動き、薄くなった部分からは海岸線にそって群生する松の防風林が姿を見せつつあった。それは長きにわたって見慣れた光景以外の何物でもなかったが、それだけに見慣れぬものを発見するのもまた容易であった。

「なんだ？」

老人の言葉の語尾が上がると、それにあわせるように腰が浮きたった。半開きになった口許からくわえていた煙草が落ちた。

「地下足袋、じゃねえか」

まだ濃い霧が完全に払拭されていないせいで、全貌は見えないが、それはまぎれもなくよく見かける地下足袋そのものだった。ただ一点、その地下足袋の大きさが十五メートル近くあるということを除けば。

「だけどいいちゃん。あんなもの昨日まではなかったぞ」

「なんかの看板かあ。昨日の大風で飛ばされてきたのかな」

「あんな大きな看板があるわけねえよ。ビルぐれえあるぜ」

「それは、そうにはちがいねえが」

二人は何度も目をしばたたかせながら、目の前にある異様な物体に目を凝らした。しかしそれはどうみても見まごうことなき、地下足袋に違いなかった。キャメル色のゴム底、黒い布で覆われた甲。親指と他の四本の指を隔てる割れ目。そして大きさもさることながら、その物体が異様なのはゴムや布地、何よりもそれに覆われた内部に圧倒的な質感があることだった。

「隆志。舟を浜に戻してみろ」

老人が命じると、若い男は慌ただしく櫓を手にし、舳先を浜の方向に転じた。

穏やかだがやむことなく吹き続ける風に、霧はどんどんその濃さを薄めていく。それにとまって地下足袋の甲の部分があらわになり、さらに踝くるぶしのあたりが、そして脚の部分までが見えてきた。

せわしなく鳴っていた櫓の音が止まった。

「なんだ、ありや……」

沈黙を先に破ったのは老人である。浜の波打ち際まではまだ五十メートルをゆうに残してはいたが、地下足袋の頂点を見上げる老人の頭部は顎がすっかり上がった形になっている。

「人だ。いいちゃん。ありや人だ」

若い男はその場に膝からへたりこんだ。

「馬鹿言うんじゃない。なに言ってる。あんなおっきい人間がいるわけねえだろうが」

常識で考えるまでもなく、足のサイズが十五メートルもある人間など、この世のどこを捜してもいるわけがない。しかし、まぎれもない現実を前にして老人の言葉にいささかの説得力もなか

った。

「だけでも、じいちゃん。ありや人間だよ。どう見ても人間だ」

風がわずかに強くなった。それにともなうてまるで劇の舞台の幕が引き開けられるように霧が風上から風下に向かつて塊かたまりとなつて移動していった。遮るものがなくなつた朝の太陽が一気に差しこむと、それまで部分でしか見えなかつた物体の全貌を鮮明に照らしだした。

それはまさに「異様」という言葉をもつて形容するのに相応ふさわしい光景だつた。朝日を浴びてひとときわ鮮やかな緑に映える松の防風林を背景に、その前に広がる砂浜。日本情緒溢あふれた風景の中に横たわる物体は、地下足袋に作業着を着こみ、首にはピンクのタオルを巻いていた。砂浜に無造作に転がる露出した五本の指もはつきりと分かる。かたわらに転がった黄色に塗られた半円球のこれまた巨大な工作物は、どうもヘルメットであるらしい。それが邪魔になつて頭部は見えないが、どう見ても巨大な人間だつた。

「に、に、に」

「人間」と叫ぼうとした老人が、目をむいた。

「きよ、きよ、きよ……巨人だあ！」

嵐の過ぎ去つた静かな朝、穏やかな潮騒しおさけの音をかき乱さんばかりの勢いで、若い男が悲鳴ともとれる叫び声をあげた。

それが事件の始まりだつた。

早朝の静寂を打ち破りながら、けたたましい電子音とともに一台のパトカーが小さな漁村のメイン・ストリートを駆け抜けていく。漁村の朝は早いのはいつものことだが、常にもまして人の

姿が多いのは、昨夜半まで吹き荒れた台風のと始末があるからにちがいない。

「なんだ。なんかあったのか」

「土左衛門でも上がったのか」

明滅する赤色灯、そしてドツブラー効果の法則に従って、急激に波長を変えながら浜の方向に向かつて走り去っていくパトカーを、不安と好奇心が入り交じった眼差しで人々の目が追う。

パトカーは短いメイン・ストリートを抜け、海岸へ続く細い道の手前で止まった。

呆けたような表情を浮かべ、その場にへたりこんでいる老人。そのとなりで、若い男がこれもまた放心状態で立ちつくしている。だらりと両脇に垂れた腕の先が小刻みに震えている。

「おお喜三郎さん。あんたかい、通報したのは」

小さな町のことである。すでに顔馴染みの警官は、パトカーから降りたつと、地面にへたりこんでいる老人に向かつて、落ち着いた声で言った。

「九十九里一から本署。現場到着」

ハンドルを握っていたもう一人の警官が、無線機に向かつて規定通りの報告を入れる声が聞こえる。

「なに、化け物が出たって。電話じゃ何のことかさっぱり分かんなくて、とりあえず飛んできたんだが」

「巡査様。化け物が海岸にいたんだよ」

「化け物お？　どんな化け物だ」

警官は眉をひそめ、老人の背後に広がる水田の向こうの松の防風林の方を見た。

「喜三郎さん。夕べの台風の中に、あんたこっちの方ずいぶんやっただんじやねえの」

ついでに、たまたまで運転席にいたずつと年の若い警官が、親指と人差し指で盃を持ちあげる仕草をした。

「そんなんじゃないやねえよ。ものすげえ大男が浜に打ちあげられているんだよ」

血の気が失せた顔の中で、若い男のこわばった口許だけが動いた。

「大男お？」

若い警官はすつ頓狂^{とんきやう}な声をあげたが、相手の顔の表情からするとあながち嘘を言っているとは思えない。

「どのくれえの大男だ。ジャイアント馬場ぐれえの大男か。それともアンドレ・ザ・ジャイアントくれえか？」

いくぶんあらたまつた口調で聞いた。

「そんなもんじゃねえ！ その何倍、いやその何百倍の大男だよ」

若い男は血相を変えると、どなるように言った。

「喜三郎さんも隆志も、揃いも揃ってなに言ってるんだ。おおかたふやけた土左衛門でも見たんだろうが、ジャイアント馬場の何百倍の人間なんているわけねえべ」

らちが明かないと見たのか、中年の巡査が取りなすような口調で間に入った。

「それが本当にいるんだ。嘘じゃねえから来てみるって」

論より証拠だ。こうなれば説明するよりも現物を見せる方が早い。

そう考えた若い男は、突然踵^{かかと}を返すと先に立って浜に向かつて歩き始めた。

二人の警官は、その勢いに気圧^{けいあつ}されるように一瞬顔を見合わせたが、かといってここはその男について浜に行ってみる以外何ができるわけでもなかった。通報があれば現場を確認するのが警